

今回の訪中は時期が就職活動と重なっていたこともあり、訪中後は今自分が向き合っている「将来どう生きたいのか」の問いかけに対し、明確な軸を見出すことができた。

1・日本と違った中国の労働スタイルへの驚き

企業家の施設を訪れたとき、生産性や利益を第一にした、日本では実現できないようなワークスタイルに驚いた。日本の企業は手書きを好んだり、面と面での作業を好んだり、縦社会、年功序列が社会の基盤である。そうでない会社もあるが、伝統があり、大きな会社ほどそうした傾向を好むように感じる。しかし、最新の設備を通じた新しい仕事の仕方や、発達した技術、とことん無駄なものをカットし実力や成果を優先した中国の会社を目の当たりにし、結果や利益を大切にする国民性が反映されていると感じた。一つ一つの工夫や設備によって利益を生みやすくなっており、そうしたことにはしっかりとお金をかけている印象だ。仕事の効率性を上げるために投入された睡眠カプセルはその例の一つで、会社でよくある「昼寝スペース」や「リラックス空間」を設けるのではなく、酸素供給もしてくれる本格的な大がかりなカプセルを導入して短時間でしっかりと生産性を向上させていた。

同時に何かを協力して行ったり、訪中中で出会った学生たちのように1日で親睦を深めあったりできるのは日本の良さだと感じた。ホテルでの夕食時、中国人学生がテーブルに来て、幼少期の部活や習い事の話をしたとき、それぞれ何かしらのスポーツや習い事に打ち込んだ経験や思い出があったが、中国人の子は幼い頃から朝早くから夜まで勉強だと言っていた。中国人の学生にアルバイト経験はほとんどしないし、何かを協力する経験が少ない、いつもどこかに競争心がるように感じると言っていた。日本人の場合例えば部活動でチームが弱くても、勉強ができなくてもそうした仲間や友達と過ごす日々や経験がその人の人格や考え方のもとになってくると思う。そうした考え方の文化が根付かない中国だからこそこうしたビジネスが広がっていくのかなど思った。

2・自分の目で実際に見たものこそ本物の財産

台湾で過ごした5ヶ月の留学生活、交換留学先の学校の友達や現地のテレビ、SNS、香港へ旅行に行った3日間、そしてアルバイト先で香港人の社員と働いた1年間。私にとって中国への印象は彼らを通じて、良くも悪くも色々な話を聞きながら自分のイメージを膨らませてきた。また、大学3年時からは日本でも中国経済や文化の授業を履修したり、上級の中国語クラスに参加して中国本土を題材にした教科書で学んだり、隣国日本から見た中国の今を学んだ。中国から日本にきた留学生や、多文化共生の地域カリフォルニアの中国系アメリカ人などと交流し、移民社会になりつつある中国の今も感じてきた。そのように、人を介して中国への想像を膨らませてきた中国をやっと今回自分の目で見ることができた。

公共の場でもお構いなく大きな声で話す人、道端や店内で堂々と喫煙をする人、サービスやスーパーのレジに笑顔が少ない、衆衛生環境が大変良くないなど、よく話で聞いてきた、日本人がイメージする典型的な中国のイメージに重なるものもあった。しかし、それ以上に、長い歴史を通じて築き上げた文化や建造物に触れ、その美しさを心に留められたり、個人の観光では訪れることのなかった場所を訪れたり、お互いの国交や未来のために熱く交流する様子や、私たち日本人を暖かく迎え入れてくれた学生に出会うことで得た感動が遥かに大きかった。やっと中国を訪れることができた、教科書で見ていた、授業で学んであの中国に今自分がいるのだと思うとより感動が高まった。

中国人が日本を訪れることは最近のインバウンド消費を見ても明らかだが、中国本土を訪れる日本人はそれに比べて少ない。観光だけが全てではないが、今後私たちも、中国の政治や観光客だけに注目するのではなく、そうした数々の素晴らしい歴史や暖かくもてなす人々、一生懸命学業に励む学生など、良い面にも注目していけたらと思う。やはり自分で足を踏み入れ、実際のものを見て感じたものが一番の糧になると感じた。

3. まとめ

めぐった数々の場所から見た感動的な風景、出会った中国の方々、見た印象や心に残ったこと、貴重な体験を通して、新しい場所に足を伸ばす楽しさや学ぶ喜びを感じた。私の中国語は台湾で身につけたものだし、友達もほとんど台湾にいて、中国へいくことはないだろうと思っていたが、北京を訪問した今、今回行けなかった場所に行ったり、別の都市を訪れたり中国の素晴らしさを今後さらに感じていきたいと思った。

将来は自分の武器である中国語を通じ、中国、台湾、香港、それぞれの状況や国民性、歴史などを理解した上で良いところに目を向けながら、それらの国々と日本人を繋ぐ客室乗務員になりたい。その先も、自身の中国語や貴重な経験をさせていただいた大学生活の全てを生かして、もっと世界へ幅広く活動の場を広げ、多様性を広く受け入れるグローバルな人材になりたいと感じた。

今回、日本青少年代表団として中国を訪れた。そこで、天安門や万里の長城などの歴史に触れ、中国の大学生や、中国側のスタッフの方、現地の方とも交流をして触れ合うことができ、とても貴重な経験をさせて頂いた。

私は中国に行くまで、中国に対して2つのイメージを抱えていた。1つ目は、空気が汚染されていることである。PM2.5が高く、常に霧がかかっているようで、マスクをしないとくしゃみが出てしまうのではないかと考えていた。自動車の排気ガスが多く出ていて、ガス臭いと考えていた。

2つ目は、人柄についてである。口が強く、自分の主張が強いと考えていた。列に並んでいても、横入りをするイメージがあった。しかし、実際に中国に行き、町並みを見て、観光して、交流会をするうちに、これらのイメージは覆された。

1つ目の空気汚染については、晴れている日に雲が多いように感じる程度で、その雲だと思っていたものが空気であるとはわからなかった。くしゃみが出ることもなくマスクをしなくても歩けた。

また、中国人は昔から自転車を使って移動していたようで、今では様々な会社がレンタル自転車を用意していた。バスはガスではなく、電気で動いているバスがあることを知った。あまり、排気ガスを減らすことをしていないと考えていたが、排気ガスを減らす努力を日本よりも徹底しているように感じた。

2つ目の人柄については、中国人は強がりなんて事はなかった。むしろ、質問したら丁寧に答えてくれて、困っていたら手助けをしてくれた。日本人・中国人と区別するのではなく、人として関わるのが大切であると思った。日本人の中にも、優しい人と、意地悪な人と様々いる。中国人もそれは同じなのではないかと思った。偏見を持たず、その人の声に耳を傾け、視線を合わせてみることで理解することができるのである。

私は将来、子どもと関わる仕事に就く。上記の体験を通して、いつか出会う子どもたちに中国訪問で学んだ2つのことを伝えたいと考えた。

1つ目は、事実を知るということである。何も知らないのに、少しの知識で判断するのではなく、実際に勉強して、知識を得て、関わるのが大切であることがわかった。何も知らないからただの推測で話し、推測だけで話し込むことで本当のことであるように勘違いを起こしてしまう。また調べようとしていないから誤解が起きたままになってしまうのではないかと思う。

2つ目は、偏見を持たずに物事をみるようにするということである。日本人だから、外国人だからと区別するのではなく、目の前にいる人はどのような特徴を持っているのかを知るということを伝えていきたい。外人を見る目だけでなく、障害児についてもそうであると思う。私自身も偏見を持って関わってしまうことがあるので、考え方を変えて、子どもたちの見本になりたい。

2つのことを、私が見本になって行動でも伝え、何事にも興味をもって関わる子どもになってほしいと思う。

私は今回ご縁があって中国に行き中国の雰囲気や文化を体験した結果、中国に対していまでも興味を抱いている。

先にも述べたが、将来子どもと関わる仕事に就くので、中国人の大学生と交流した際に、中国の幼児教育について質問をした。今はVRを使う幼稚園があると聞き幼児教育にもVRが入ってきていることに驚いた。しかし、中国は格差が大きいと聞く。

これから、地域によって遊び方が違うのか、日本と同じような保育はしているのか、その違いについて学び、日本でも実現できそうなことは積極的に実践したいと思う。

また、友人に中国での出来事を伝え、少しでも興味を持つきっかけを作りたい。そして、今回の中国訪問で少し中国語を学んだので、子どもたちに中国語を教えることで、中国に対し関心を持つ手助けになるのではないかと考えた。

「訪中を終えて考えたこと」 大山 耀史

私が最初に今回の中国への訪問は中国語のゼミの先生に誘われたのがきっかけであった。そもそも私が中国語のゼミに入ったきっかけは第1志望であったゼミに落ちて、どこのゼミに所属しようか迷っていたところ、いつも今所属しているゼミの先生が面倒をみてくれたというのが理由であり、中国語を勉強したいからではなかった。そこから中国語を勉強するようになり、正直最初は興味なかったが勉強するうちに楽しくなりもっと中国語を勉強しようと思った。今回の訪問で中国に行くのは2回目であった。1回目は学校の授業で行ったのでどちらかと言うと勉強がメインであった。しかし、今回は中国の学生との交流がメインであった。それに今回一緒に行くメンバーはみんな初対面の人しかいないのですごくワクワクした反面、不安も大きかった。実際に中国に行き、前回中国を訪れたときも天安門や万里の長城に行ったが、季節が夏だったのでまた違う景色が見ることが出来て飽きることなく新鮮な気持ちで観光することができた。中国のショッピングでは押し売りがすごく、値切るのが当たり前なのでそれを最初知らずに買ってしまい損したのは良い経験だった。4日目には今回一番のメインイベントでもある日中大学生1000人交流会があった。このイベントのために来たと言っても過言ではないくらいである。このイベント会場も人民大会堂という普通の学生や大人では絶対に入ることができない素晴らしい場所で行われた。おそらくこの先60年ほど生きるがこの中に入る機会は一生ないだろうと思うくらいすごく良い経験だった。でも正直もっと交流会を通して現地の大学生と話しが出来ると思ったら、一緒に会場で式をただやるだけだったのでそれは残念だった。せつかなので少しでも現地の人と交流して仲良くなれない時間がないのは本当にもったいないなと思った。日本人500人中国人500人が同じ会場に集まることなんて滅多にないし、次はそこを改善して欲しいなと思った。今回の中国への訪問を通して最初は1万で中国行けて旅行気分で行ければいいなと思っていたが、良

い意味で予想以上のものを経験することが出来た。一緒に行った2B班の人達ともここまで仲良くなれるとは思っていなかったし、日本に帰ってきた今でもみんなとは連絡を取り合っており今度みんなで食事会があり本当にこの2B班で良かったなと思った。またそれだけではなく、最近では就活などがあり学校の授業でも中国語がとってないので勉強を全然していなかったが、今回をきっかけに現地の人と中国語で話せないのが悔しく、また勉強を再開したのも大きな一歩に繋がった。今はとりあえずHSK4級合格を目指している。就職先は中国とは全然関係ないが、大学卒業した後も中国語の勉強だけは絶対に辞めないでこれからも続けていきたい。そして、まだいつかは分からないが中国語を使って仕事や人の役に立つことが出来れば良いと考えている。私の大学生活の中で一番の良い思い出と言えるくらいの経験が最後に出来てとても良かった。この経験をただの良い思い出としてではなく、日本と中国のために色々な人に伝えていければ良いなと思った。

「刺激を受けた5日間」 小椋 洸

私は2019年北京、天津、深圳、香港、澳門に訪れた。今回の訪中団の活動を合わせると北京に3回訪れている。私は初めて行った中華人の都市は北京であった。2019年の3月に旅行として北京へ訪れた。この時は見るもの全てが新鮮で、毎日不安感があったが高揚感もあり刺激的な時間を過ごした。次に夏休みの1ヶ月間、北京师范大学に短期留学で訪れた。1ヶ月間ということもあり、北京についてある程度の知識を得ることができた。

そして、今回の訪中団だ。私は、ゼミの教授に声をかけていただいたため参加することを決めた。参加の理由としては主に3つある。1つ目、参加費が1万円だったため。2つ目、卒論の資料集めで中国に行く必要があったため。3つ目、この活動の経験を就職につながると思ったためだ。今回の訪中団を終えて考えたことを以下に3つ書いていこうと思う。

1つ目、この活動の初めは、顔合わせ兼研修会であった。班全員の自己紹介が終わった後、まず驚いたのが中国語はおろか中国にさえ行ったことがない人がいた。私は専攻が中国でなければ中国に行くことはなかっただろう。やはり、日本国民はメディアの影響で中国に対してのステレオタイプがあると思ったからだ。しかし、話を聞くと実際に自分の目で見てギャップを感じたいと話しを聞いて驚いた。もちろん、同じ班には中国への留学経験がある人もいた。また、それぞれの専攻分野があり個々のレベルアップを図ろうとしている班員を見て私は刺激を感じた。

2つ目、中国人との交流だ。2日目に訪れた北京城市学院、1000人交流会、バスのガイドさんとの交流は有意義であった。毎回中国人とお話をして思うのが、勉強熱心であること。1000人交流会で出会った中国人は一生懸命に日本語を勉強しており、微信で連絡をとっていると日本語の教科書を見せてくれた。また、ガイドの翟さんは日本語通訳を行っていただいたが、日本に行ったことはないと言っていた。それなのに、日本語を流暢に話していたので相当な努力を行ってきた事がわかる。日本人は中国人から見習う事がとても多い。私自身中国人とお話をするたびにモチベーションが上がり、中国語を勉強する力となっている。

3つ目、普通の旅行では体験の出来ないことを体験することができた。その一つとして人民大会堂での1000人交流会だ。中国人にが言うには中国人でも人民大会堂は入ったことがないそうだ。それなのに日本人の我たちが入る事ができることはすごく貴重な経験だと思う。また、日中友好として5年以内に3万人交流会の初めの一歩として参加できたことは素晴らしい経験になった。

今回の活動は様々なタイプの方々と出会い、異国の文化に触れて、私にとってとても有意義な時間となった。この活動の裏には多くの人々の支援があったために実現できた事である。

今後日本は、中国人に対するステレオタイプをなくしていく必要がある。まず、メディアを鵜呑みにしてはいけない。これは、中国以外の外国に対しても言えるだろう。異文化を理解することは、とても困難なことである。実際に現地を訪れ、肌で文化を感じ、日中の友好がよくなることを願っている。

日本中国友好協会の皆様、中国人民対外協会の皆様、中国日本友好協会の皆様、北京城市学院の皆様ありがとうございました。

「中国を新たな視点で捉えることのできた5日間」 北垣璃乃

大学生時代における上海での短期語学研修、天津と北京への旅行をはじめとした訪中や日本における中国出身の学生との交流など中国と関わる機会が過去にあったことから、私自身の中国に対する総合的な印象は良かった。そして、日頃お世話になっている教授よりお誘いを受け応募した訪中経験を通じて、中国文化や現地の人々の人柄に触れ益々中国の偉大さに尊敬の念を抱いた。

社会人となる前に急速な経済成長を遂げる隣国・中国を理解し、今後の自分自身のキャリアや学習と結びつけて学びたいという動機を持って今回参加したことは大変意義のあることだったと考える。また訪中前、応募の動機や期待することなどの考えを5日間共に行動するメンバーと共有する研修があった。そこでは日本人の大学生の様々な考え方やバックグラウンドを知り、自分自身の更なる成長への刺激となったと同時に、互いの考えを深めることができた。

北京到着の翌日に参加した北京城市学院航天城キャンパスでの交流イベントでは、現地の大学生が常に周囲を見ながら、丁寧に教えてくれたり、時には見守ってくれたりと温かな姿が印象的だった。またその夜には歓迎会があり、中国からの演し物を通じて、日本文化などに関心を持っていることが伝わり、心が温まった。そして多くの中国の学生の流暢な日本語能力の裏には、多大な努力があることを実感した。

3日目には、ユネスコの世界遺産である万里の長城や天壇公園を訪れることができた。これらの歴史的建造物の歴史を学び、中国の広大な国土からなる建造物のスケールの大きさにより圧倒された。世界的に歴史的価値が評価されている建造物が中国にこれほど多く存在している一方、日本人の中国本土への旅行者数はあまり多くない。これは日本人の中国(人)に対して「良い」印象を持っていないことが、要因のひとつだろうと考える。数多くの建造物や文化があるにも関わらず、日本人の間でそうした豊かな面が知られていない傾向にあることに歯がゆい気持ちとなった。

4日目の午前中、北京を拠点とするコワーキングスペース事業者である「Ucommune(优客工场)」にて施設見学した。北京、深圳や上海などの中国国内、そしてアメリカやシンガポールにも海外展開を積極的に行っており、設立後から現在に至るまでのビジネス展開の速度に驚いた。中国と同様、日本国内都市におけるシェア・レンタルオフィスなどの市場規模を年々拡大しており、コワーキングスペースを活用したオフィスの需要が高まっている。この企業視察を通じて、中国や海外における市場動向及び中国企業の事業展開の動きを注視し、日本企業はグローバルな視点を持って素早く判断しビジネスチャンスを掴むことの重要性を学んだ。午後には、人民大会堂にて中日青少年交流大会が開催され、日中両国合わせて1,000人が参加した。残念ながら中国の学生と直接話す機会はなかったが、中日青少年交流促進年として両国政府らが様々な交流活動を開催し、相互理解を深めることを促進していることが見られた。改めて日本青少年代表団の一員として参加できたことの素晴らしさを感じるイベントであった。

最後に、他国との今後の付き合い方は多種多様である。しかしまずは観光客やどんな立場としてでも実際にその土地を訪れることにより、先入観や固定概念をなくすことにつながるだろう。そのため日本人もまた中国を訪れることで、中国(人)に対する印象が大きく異なっていくと考える。また大学卒業後の私自身が働く業界は、中国企業の海外進出が多く、中国(人)との関係はより多くなるだろう。そのため今回の訪中で得た中国の若者の勉学に対する意欲や新事業展開などの刺激や学びを糧に、自分のこれからの人生のキャリアプランにむけて励んでまいりたい。

「日中友好訪中団」 倉迫 偉豊

私は、日本の大学生100名の一員として、中国の大学生の方々と交流を深めると共に中国の文化や歴史を学ぶことができる訪中団に参加できたことを心からお喜び申し上げます。

私は、何度か中国に旅をして、いろいろな経験値を得てきましたが中国の大学生との交流は今回で初めてです。最初は中国の大学生との交流の前に5日間、訪中団の一員として共に学んでいく仲間たちとお互いのことを知るために研修会を行いました。中国に旅立つ前に慣れていない複数の前での自己紹介はすごく不安で緊張しましたが、その壁を乗り越え、自分の中国への思いや気持ちを伝えることができた一歩、レベルアップできたのではないかと思います。今回の日中友好訪中団では普段、体験することのできない中国の大学校内見学や、学校内交流、そして、人生で体験できるかできないかの人民大会堂での日中大学生千人交流会を行いました。私にとってハードスケジュールの中、21日の学校交流では中国結びという台湾で発展して紐を用いた伝統工芸を体験することもでき、教えてくださった先生の手本を注意深く見ながら作業をおこなったのですが、中々うまく紐を結べず前頭葉をフルに生かしたつもりでしたが、自分が不器用だったのかとそこで初めて知ることもできました。私の入っていたグループのみんなもスムーズには進まず、苦戦していましたが完成したときの達成感は今までにないほどの感覚でした。中国の大学生徒もフレンドリーに接してくれて楽しく作業を行うことができました。そして、21日の夜に開催した歓迎会にも参加し、たくさん踊りや歌で楽しませていただきました。22日には人生で2度目となる万里の長城に上り、高低差の激しい階段を一生懸命のぼり、頂上まではいけませんでしたが目標としていた場所に上りきったという達成感(運動有力感)を体験することが自分の目標でもあったため、日中友好訪中団に参加でき、今の自分より一個上にレベルアップできたなど強く実感しました。一回目は私がまだ10歳の頃に上りましたが、大学生として上ると万里の長城の見方が大幅に変わり、歴史や文化を感じることができました。そして、その後ホテルに戻り、班のみんなと集まり交流を深め楽しい日々を過ごせました。いよいよ23日の人民大会堂での日本大学生500名、中国大学生500名の千人交流会に参加し、数人ではありましたが中国の大学生と積極的に交流しに行き、将来の夢などをお互いに言い合える仲にまで上り詰めることができました。小さい頃、中国は治安が悪くて、民度もあまり良くはないと聞いてきましたが私は、そうではないと強く自分を信じ、中国の大学生に積極的に話をかけ実際にそうではなくフレンドリーに接してくれて中国への思いや誤解を完全に解くことができました。片言の中国語で話をかけ、最初は笑われてしま

うのではないかと感じていましたが決してそうではなく、一所懸命学んだ語学をフルに使うというのを理解してくれて真剣に私の話を聞いてくれましたし、とても私としても話しやすかったです。たくさんの経験を得たところで最終日の24日に中国国際航空で長いようで短い中国での旅はここで幕を閉じるようになったときは、悲しい気持ちでいっぱいでした。今まで何度か行ったことがあるが、今回の日中友好訪中団の一員として歴史、文化や中国という国を改めて偉大な国だと深く知ることができ、人生で体験できるかできないかの経験ができたことを誇りに思います。そして、こういう中国大学生と日本大学生の友好関係を深める企画を設けてくださった、団長や日中友好訪中団に関わる方々に感謝したいと思います。安全に案内、指導して下さってありがとうございます。

最後になりますが、今回の企画で大学生として、人として、自分にとっての大きな巨大な壁を乗り越えることができました。今回の経験をフルに生かして、これからの中国人との交流に限らず、中国への気持ちを好印象を持っていない方々につたえられたらなどと思います。

「今後の私はどうあるべきか」 齋藤 友里奈

私は今回が6度目の中国、4度目の北京訪問でした。最後に中国を訪れたのは、10月末から11月上旬にかけての12日間です。そこから約1か月半で再び中国へ行く機会をいただけたことに心から感謝しています。これまでの訪中はすべて派遣団や代表団、留学によるもののため、いつかは自分自身で中国に限らず世界の様々な国へ訪れることができるようになりたいと考えています。

今回の訪中で特に印象に残っているのは、中国が青年の起業を強く推進しているということです。优客工場を見学した際に中国では就職先が不足してきており、その解決策として青年の起業を促すようになったと伺いました。日本にいただけでは中国の就活情報に目を向けることがないため、すこし不思議な感覚になりました。話す言語は違えど、就職するのが大変であるという悩みは同じであることもそうですが、働く場所がなければ作ってしまえばよいという発想を持つ青年は今の日本人には少ないと感じるからです。优客工場で起業のために努力している青年の姿は刺激的でした。コワーキングスペースでありながら、ジムや食堂、音楽を楽しむための防音部屋、仮眠をとるためのカプセルなどが設置されていることから、起業を全面的にサポートしていることが感じ取れました。もとはスーパーが入っていた場所にコワーキングスペースを創り上げる発想力にも驚かされました。私自身は起業にそこまで興味を持っていませんが、興味を持っている日本人青年のために国も動いていく、変わっていく必要があるのではないかと感じました。

私が今回の訪中で個人的に掲げていた目標として「中国人学生に積極的に話しかける」というものがありました。結果としては、学生のみならず中国側の受け入れ先の方ともかかわることができ、無事に目標達成となりました。この結果を受け私の中では今後、「個人」と中国人の交流だけではなく、「日本人」と中国人の交流に貢献できるような人材になりたいという思いが生まれました。自己主張能力、自己表現力もちろん大切であると思うのですが、人間には相性があります。「個人」で挑んで相性が合わずに関係が途絶えてしまうよりも、「日本人」で交流して逢う人が関係を続けていったほうが、日中交流、日中友好、など様々な面で良い結果が得られるように考えます。そのために、中国語を話せない日本人のサポートができるようになりたいと強く感じました。今後控えている留学を通して、必要な語学力を身に付けていきたいと思っています。

交流については日々交流からも改めて学んだことがありました。それは明るく元気に笑顔でコミュニケーションをとることが、交流するうえで非常に大切だということです。200名という大所帯で中国を訪れるのは今回が初めてだったため、どのように声をかけるべきか最初は少し悩みました。しかし、私が何度か話しかけていると相手も徐々に認識してくれて、声をかけてくれるようになったことが本当に嬉しかったです。同じ班のメンバーはもちろん他の班や号車、関西組の参加者ともお話しできたことがとても貴重な経験となりました。今後日本人と交流するときはもちろん、中国人や海外の方とコミュニケーションを取る際は、今回の学びを生かしていきたいと思いました。

日本の首都・東京から遠く離れた北海道で私は一体何ができるのか。私だからできること、私の武器、私に不足しているもの、私の伸ばすべきところはそれぞれ何なのかを考えながら中国留学へ向かいたいと思います。そして帰国後には日中交流に貢献できる人材として活動できるようにしたいです。

「訪中の中で変化した自分の心」 佐藤 宏祐

緊張と不安、そして少しのウキウキ。自分が訪中に行く前の気持ちでした。それもそうです。海外に行くという経験自体初めてだったからです。人は誰も初めての経験は怖い。ギリギリまで空港で止められたりしないか、同じ班の人たちはどんな人なのか、中国語はあまり話せないが、学ぶことはできるだろうか。中国という国の治安や環境は安全なのだろうか、出し手も出してもきりがなくらいに不安が募るばかりでした。

そんな不安をよそに、時間は刻一刻と迫っていき事前研修会が始まりました。今後の日程、空港での説明、中国に行ってから気をつけること。重要な話を終え、班に分かれてのミーティングに入り自己紹介、ここでも他のメンバーたちは、「留学の経験があります。中国語、英語、他の言語を話すことができます。海外は何度も言ったことがあります。」自分は思いました。場違いだ、、、と。ほんとに自分はやっていけるのか、今にも食べたお昼御飯が出てきそうでした。

そんな衝撃的な班ミーティングも何もなく無事に終わり、飛行機に乗るため空港へ出発。この時も飛行機のことでも不安でいっぱいでしたが、実際に登場の手続きや、検査はスムーズに進み快適な飛行機ライフを過ごすことができました。

そして、遂に待ちに待った（緊張でそれどころではないが）中国に到着です。実際に外に出てみると深夜ということもありましたが、とても寒く吐く息は日本の何倍も真っ白で、覚悟はしていましたが驚きました。ここで中国に行ったことのない人は、

「空気は大丈夫なのか、PM2.5は？」

と、思うかもしれませんが自分が中国にいる間にマスクが必要だと感じたのは、飛行機の移動、バスの移動、寝るときだけです。それも、空気が悪いからではなく乾燥を防ぐため（寝ていると口が開いてしまうため）ですから安心して快適に過ごすことができました。移動を終えた後はホテルに直行し、移動や緊張からくる疲れでぐっすり眠ってしまいました。

二日目に入り、ホテルでの朝食を済ませ北京城市学院へと出発です。ここでは、北京城市学院の皆さんとの交流でした。卓球や、絵画、中国結び作りがあり、班ごとに体験することができました。自分の班は中国結びを作りました。色鮮やかな糸を組み合わせ、結びながら、ライターであぶりながら作成するのですが（気になる方はぜひ一度作ってみてほしいです。とてもかわいいです。）細かい作業が多く、不器用な私にとって難しく、かまっていました。すると、

「Excuse me English ok？」

声をかけてくれたのは、北京城市学院の生徒の人でした。慌てて、

「Ok! I don't know」

わかる言葉がこれくらいしかありませんでした。すると、流暢な英語とともに作り方を教えてくれました。声をかけてくれたことも嬉しかったですし、英語が上手で驚きました。周りの声を聴くと、日本語も上手に話している人も多くいて圧倒されました。この状態が当たり前なのだ、自分がまだまだなのだ痛感しました。体験はとても楽しく、不器用ながら助けてくれたこともあり完成することができました。お気に入り日本で帰ってきてからもバッグにつけています。

午後は天安門広場、故宮博物館を見学しました。驚いたのは広さです。歩きに歩いてやっとたどり着くという感覚です。若いうちでないと体験できません。

その夜は、歓迎会でした。豪華な食事や華やかな出し物で大いに盛り上がり最高の歓迎会になりました。特に、Japanese otaku（オタクのダンス）を中国の方が踊ってくださったときは、会場が一番盛り上がりました。そうして、興奮冷めやらないままに二日目の日程が終了しました。

この二日間だけでも、多くの体験ができました。自分が知らなかった世界がすぐ近くに広がっていたなんて想像もしていませんでした。今回の訪中で感じたことを一言で表すと、<百聞は一見に如かず>です。今までの自分は中国に行って実際に見たことがないのに勝手なイメージ、聞いた印象だけで判断しあまり良いイメージがありませんでした。実際行ってみると、そんなイメージとは真逆で、ご飯はとても美味しく、日本から来た自分たちを歓迎してくれて、優しく、友好的で、こんな素晴らしい国なんだと心の底から思いました。例え、政治の上で対立していたとしても人と人との関係は影響されてはならないと思います。友達になるのに国境や政治は関係ありません。

<人類みな兄弟ですから!>

もし、何かを挑戦しようと考えているけど悩んでいる人や、体験したことがないのに、勝手なイメージで偏見を持っている人はぜひ一度挑戦してみてください。自分もあんなに怖がって（ビビって）いましたが、今は行って良かった、絶対に中国も含めいろいろな国に行きたいと心の底から思っています。今回このような機会をつくってくれた方々、引率をしてくれた日中友好協会の方々、おもてなしをして下さった中国の協会の方々、北京城市学院の生徒の方々、同じ班になった2-Bのみんな、訪中に携わって下さったすべての皆さんに感謝しています。そして何より、自分の背中を押してくれた富士大学の崔先生、有限会社メンテナンス宮古の

吉田恵美子様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有難うございました。今回体験できたことは、間違いなく自分にとってプラスの経験になりました。この良い経験を忘れず、自分の夢のために邁進していきたいと思います。

(三日目以降の体験は、文字数の関係で書きませんでした。いつか、お話しできる時が来たら、思い出話として書けたら良いです。)有難うございました。

「中国で感じられた新しい価値観」 高田零央

私は今回の日中友好協会の訪中で学んだこと、感じ取ったことを感想文としてご紹介したいと思います。私の訪中する前の印象としてはあまりいい印象ではありませんでした。なぜかというよくニュースなどで中国観光客のルール違反、スポーツなどでのフェアプレー、中国での反日デモなどを見ていたからです。現地に着いてからも日本人に対してどんな印象を持たれているのかとても不安でした。ですが現地に着いて一日目に訪れた北京城市学院の皆様にとってもフレンドリーに接して頂き、中国結びを体験しました。訪中前の印象はガラッと変わりとても楽しい時間を過ごすことができました。そのあとに訪れた天安門、故宮ではテレビなどで見るよりも大きくインパクトに残る建物でした特に故宮は建物のなかに歴史的記録物などがたくさん保管されており、今まで知らなかった中国の歴史を学びました。夜行われた歓迎会では中国の方々にとっても盛大なパフォーマンスを披露していただき、特に印象に残っているのは、AKB48のダンスです。自分たちの国の音楽を中国の方々も聞いているのを知ってとてもうれしい気持ちになりました。二日目の万里の長城では映像で見るとも道は急で上るのにとても苦労しましたが、登り切った時の達成感と景色はとても素晴らしいものでした。そのあとに訪れた天壇公園では今まで全く知らなかった中国の歴史を学びました。三日目の施設見学では貸しオフィス施設の見学をしました。施設内には日本で見たことのない機械やスペースがあり、中国での起業サポートはとても充実していて、経済成長の理由の一部であると感じました。午後の日中大学生千人交流会では現地の方々でも滅多に入れない人民大会堂にご招待していただきとてもいい経験をする事が出来ました。中国側の見せ物もとても盛大で日本語の「君を載せて」や踊り日本側の少林寺拳法の演武はとても迫力のあるものでした。今回の訪中では中国の学生との交流が目的でしたが、一緒に訪中をした日本人の団員達とも仲良くなれたのでとても良い経験でした。今回の訪中で訪中する前と後の印象はガラッと変わりました。例えば、日本人だからといって態度を変える人はおらず、逆に中国の方々が積極的にアプローチしてくれてきたこと、町は自分が想像していたよりも賑わっており、ごみなども落ちていない綺麗だったことなどの印象の変化がみられました。今後は中国に方と出会う機会があれば積極的に友好関係を築きたり、お互いの国の文化を共有できるようにしたいと思いました。そうすることによって日本と中国とでとてもいい関係性を築ける可能性を感じます。最後に今回の訪中で今まで自分の世界しか見ていなかったことを学びましたこれからはもっと隣国、隣国以外の国にも積極的に訪れ自分が見たことのない世界を感じ取ることでこれからの人生は大きく変わることを、また若い自分たちが行動することの重要性を知りました。

「私たちが思うイメージと現実の中国の差とは」 武田 佳輝

「中国」。皆さんはどのようなイメージを持つだろうか。おそらく多くの人はあまり良く思わないのではないかと。私もそのうちの一人であった。だがその理由の多くが、なんとなく、そんな気がするからといった、あくまでも推測にしか過ぎないのがほとんどだ。私たち日本人が中国に対して抱く不信感はどこから生まれてくるものなのか。現在の日中問題でいえば尖閣諸島問題や靖国神社参拝などがあるが、それらがこのような考えを持つ原因の全てではないと感じる。私自身もなぜ良いイメージを持つことができなかったのかかわからない。それは日本全体で作上げられているイメージなのか、自分自身で勝手に思っているイメージによるものなのか。それらを含めた私たち日本人が抱く中国に対する不信感や違和感などはどのようにして生まれるのか、実際に行ってみて感じたイメージと現実の差や中国のこれからなどについて考えていきたい。

中国は隣の国であり、日本が最も影響を受けてきた国の一つである。日本が初めて中国から影響を受けたのは、紀元前3~2世紀頃に稲作が伝わったというところまで遡る。中国と日本は2000年にも及ぶ有効往来の歴史がある。しかし、近代100年の歴史は概ね対立と抗争、侵略というくらい歴史である。その影響もあり、現代になって尖閣諸島問題や靖国神社参拝などの問題がずっと続いている。どちらの問題も日本側の主張とすれば昔に条約で、資金を渡していることで解決しているとされている。しかし向こう側は様々な理由をつけ、難癖をつけてきているといったように思える。私自身もこれらのニュースを見て、「中国人はしつこいな」、「何を考えているのかよくわからないな」と思ってしまう。また、テレビに映る中国は汚かったり偽物が多く存在していたりするイメージがある。私が中国へ行くと友人に伝えた時も、汚そう、偽物ばかり売ってそう、食べ物が出合わないなどといった否定的な言葉ばかりだった。なぜそのように思うかと聞くとやはり、なんとなくそんな気がするからといった返答が返ってきた。私自身が中国へ行く前に思っていたことは周りの友人と大して変わらなかったが、実際に行ってみて3つのことを感じた。まず一つが環境面に関することだ。中国というとPM2.5などによる大気汚染で空気は汚く、乾燥していてマスクが必須だと言われる。しかし実際は目で見てわかるほどではなかった。写真で遠くを撮るとだいぶ汚れているのは分かるが、生活していてそこまで気に

ならなかったというのが事実だ。同じように環境面でいうと、中国の街は汚いというイメージがあったがそこも思ったより綺麗だった。これには訪れたのが北京で観光地が多かったからかもしれない。2つ目は街並みなどの開発面に関することだ。中国は今急速に成長しており多くのビルたちが軒を連ねていると思っていた。しかし実際はそうでもなかったように感じる。確かにオフィス街のようなところは高層ビルやマンションが多くあった。しかし少しでも外れると昔ながらの民家が急に現れるといった感じだった。中国国内でも問題になっている貧困の格差が目に見えてわかる瞬間だった。また、建物が新しく整備されているのに、トイレがしっかりと整備されていないのには驚いた。これらを含めて中国まだまだこれからもっと成長すると感じた。3つ目は若者に対する待遇だ。今回私たちは全体で500人が中国へ訪問した。その費用はほぼ全て中国政府が負担した。中国人の若者に同じように費用をかけるならまだ分かるが、日本人である私たちにここまでの費用をかけ、素晴らしいおもてなしをし、様々な体験をさせてくれた。そんな中国の財力とおもてなし精神に感動した。

今回中国へ実際に行ってみて、私たちが思っているイメージとは反対なことがほとんどだった。私たちが中国に対して抱いている違和感などは自分自身で作りに上げているイメージでしかないのかもしれない。そんな人たちには実際に中国へ行ってもらいたい。考えがガラリと変わるだろう。是非自分のような体験をしてもらいたいと思う。また、青少年代表団の一員となれたこと、素晴らしいバックグラウンドや考えを持った学生に会うことができて良かった。また機会が何らかの事業に参加したい。

「若者を支える中国」 栃川彩奈

今回の訪中は縁があり参加したため、正直なところ他の参加者のような、中国の文化に興味がある、中国という国が好きだという気持ちは特にありませんでした。ただせっかく参加するのであれば旅行感覚で終わらせるのではなく、何か自分の人生に活かせるものを得て帰国しようと考えました。そこで私が決めた訪中目的は「中国の急速な技術発展と経済力はどこからくるものなのか実際に見て聞いて考える」でした。

私は大学で海底資源について学んでいる俗に言う「リケジョ」です。そのため世界の文化などには詳しくありませんが、中国の急速な技術発展、国としての経済状況を大学の教授と話し合ったりなどはしていました。教授から聞いた話で最も印象的だったのは、「中国政府は大学の研究に対して多額の援助をしている」ことです。現在、日本の大学の研究費は年々削減されており十分な研究ができる状況ではないため、企業との共同研究が大学研究の主な資金源となっています。共同研究で資金を賄えたとしても、企業はすぐに商品化できる技術が欲しいため20年、30年単位での研究はできないのが現実です。しかし、現在のノーベル賞受賞者のような優秀な研究は何十年もの歳月をかけたものであり、研究費の削減がそのまま続いていけば将来、日本は技術先進国の威厳を保てなくなるのではないかと考えるのです。日本とは対照的に中国は研究に対して多額の援助を行っています。事実、日本の優秀な研究者も日本では十分な資金源が得られないため中国に移り研究している人も多いようです。この話を聞いた状態で訪中し、私が得たことは大きく3つあります。

まず1つ目は、国が若者に対して多額資金援助をしていることです。私は若者起業関連施設を訪れたとき施設内の設備にとっても感動しました。どんな業種でも起業ができるようにスペースが確保されており、さらに共同スペースや書籍の多さなど日本では考えられないくらい充実した設備でした。またこの場所は国から1億6000万円ほどの援助を得ているということも聞き、若者のバックアップには十分すぎるのではないかなと思うような環境でした。この場所は若者が存分に能力を発揮できる環境が整えられているのと同時に、将来的には国としての利益になると考えると、とても有益な場所なのではないかと強く思いました。

2つ目は、中国人のあっさりとした性格です。実際に中国で生活してみても、かなりタイトなスケジュールなのにも関わらず、時間通り、または少し時間が余るような感じになっていた気がします。もちろん私たちがちゃんと時間を守ったということもあると思うのですが、決められた時間で行動するのではなく、決められた行動をできるだけ早く処理することができる中国人は仕事効率も日本に比べて良いのではないかと思います。

3つ目は、北京にはまだ開発可能な土地が多くあるということです。バスでの移動中、中国の大都市である北京には建設途中の区域や、何も手のつけられてない土地が多々ありました。大都市であるにもかかわらずこのように土地が余っているということは、国内外問わず様々な企業を呼び込むことができ、さらなる発展が期待できるのではないかと感じました。

この他にも、犯罪防止のために街中に監視カメラが設置されていたり、土地を有意義に使うために建物を高く作っていたり、またこのような環境だけでなく、中国の若者の勉学や起業への熱も感じることができました。実際に現地に行くことで、日本との違いを痛感し、今後20年、30年後さらに大きく飛躍していくのであろう中国の姿を容易に想像でき、私たち日本人も負けてられないと強く思いました。今後を支えていく若者に対して環境の整備や多額の援助をしていく中国を知れたことは、世界の動向を

考えながら国益のために研究していきたいという私の人生に大きく影響すると思います。このような有意義な機会を与えてくれた日中友好協会の皆様に感謝を申し上げます。

ps

中国での最終日にバスの中で感想を述べる機会があり、日本人大学生がこぞって「文化の違いを感じられた」と発表していたのを聞き同じ大学生として残念に思いました。「文化の違いを感じられた」ということは実際にその国に行かなくても分かることで、言えることです。このような機会を与えてもらえたのであれば、どのように文化が違うのかを感じ、それがどのように影響しているのかを考えるのが日本を代表する大学生として当然のことだと思います。次の機会があるのであれば、ぜひ「考えることのできる」学生を選考していただきたいと思いました。

「訪中団に参加して」 新村麻友

私はこれまでに中国を訪れたことがなく、今回、訪中団に参加させていただいたことで初めて、中国に行く機会を得た。

訪中前の中国への印象は、正直あまり良いものではなかった。というのも、中国に行ったことがない中で、政治面で日本と中国が対立している問題など、テレビや新聞で中国に関するマイナスな情報が入ってきてしまうため、自分の目で真実を確かめる事もないまま、その情報に吞まれてしまっていたのである。

しかし、今回の訪中でその印象はガラリと変わった。

私は、中国の方も日本人に対して、あまり良い印象を持っていないのだろう、と思っていたが、そんなことはなく、今回訪れた北京城市学院の生徒のみなさんは私たち日本人にとっても親切に接してくれた。私たちの班は、中国の伝統結びを作る体験をしたのだが、そのとき上手く作ることが出来ず戸惑っていた私を北京城市大学の生徒さんたちが優しく作業をサポートしてくれた。

また歓迎会では、日本のオタ芸や、日本の音楽を使ったダンスを披露するなど、日本の文化を尊重してくれていることが物凄く伝わってきた。その熱量を受けて、私ももっと中国の文化や言語を学びたい、と気持ちを揺さぶられた。

また、私は北京の街並みにも心奪われた。一面ガラス張りのとても高いビルや、カラフルなオフィスなど、現代的な建物が立ち並んでいるところから少し離れば、歴史的な建造物があったり、中国独特のネオン街につながったり、と日本では見れないようなネオモダンとレトロな街並みが融合していて、とても魅力を感じた。特に、世界遺産である万里の長城に実際に登れたことはとても良い思い出である。階段が一段一段高さがバラバラで、昔の人々の手で作られたことが伝わってくる反面、こんな壮大な建造物を人が作ったことが信じられないと思う自分もいた。今まで映像や写真でしか風景を見たことがなかったため、実際の目で見ることでできて本当に良かった。

今回の訪中では、個人的な旅行では行けないような、オフィスや人民大会堂に招待していただいたり、素晴らしい歓迎会を開いていただいたりと、様々貴重な体験をさせていただいた。

またこの体験を通じて、中国に対する考えも全く変わった。私のような中国に行ったことがなく、日本にいる中で無意識のうちに中国に対して偏見を持ってしまっている学生達に、ぜひこの日中友好協会が主催する訪中団に参加してもらって、中国に対するイメージや気持ちを改めて考える機会にしていきたい。

そして、訪中団に参加している全国各地から集まった学生達と日々交流ができたことも今回得た大きな財産である。私とは違って、中国文化や言語の勉強をしている人々が多く、彼ら達から学ぶことも多くあった。それぞれ色々なバックグラウンドを抱えており、話していく中でたくさんの刺激をもらった。

今回、訪中団に参加させていただいたことがきっかけとなり、中国に対するイメージが変わり、もっと中国のことを知りたい、もう一度訪問したい、という気持ちが強くなったことはもちろん、ここで得たつながりを大切に、これからの人生につなげていきたいと思う。そう思わせていただいたほど、今回の体験は大変貴重なものであった。

「中国の印象」 林 智也

私は今回の訪中団での中国訪問が初めての海外であった。訪中する前の私の中国に対する印象は、悪くもないが良い印象は持っていなかったというのが正直なところである。

その理由としては、テレビや新聞、TwitterなどのSNSを見ても中国を褒めていることを殆ど見た事がなかったこと。それ以外にも、ヨーロッパやアメリカなど他の海外と違い、旅行番組など現地の映像を取り上げたものが極端に少なく、天安門広場や万里の長城以外はほとんど何も知らない謎の多い閉鎖的な国という印象だった。そのため、今回の訪中団はワクワクというより、殆ど何も知らない謎の国へ行くという不安に満ちたものであり、少々怖くもあった。

しかし、実際に中国降り立ったと同時に、そのような印象はきれいさっぱりなくなってしまい、とてつもなく発展した中国のスケールの大きさにあふけにとられてしまった。すべて見て回るだけで丸一日掛かってしまいそうなほど巨大な空港。町中に入れば乱立する高層ビル群に、六車線もある巨大な道路。日本で普通に暮らしては知ること見ることもない中国の光景に釘付けになった。

それ以外にも驚いたのが、キャッシュレス化が進んでいるから現金は使えないよと言う事を大学の中国人留学生から聞いていたため、私は今回の訪中のために初めてのクレジットカードを作った。しかし、中国は私の想定より一歩先に進んでおり、スマホ決済が当たり前になっていた。結局私は一度もクレジットカード使わずじまいであった。日本では消費増税のポイント還元政策でここ一・二年でやっと普及し始めたスマホ決済が、中国では既に当たり前になっているのを見て、中国の発展の速さにまたも驚かされた。

中国人に対する、印象も大きく変わった。今回の訪中ではあまり大学生との交流はできなかったが、その短い時間の中でも交流していくうちに彼らも同じ学生なんだと思うことができた。

その他にもホテル到着後の自由時間で近くのスーパーの場所を通行人のおばさまに尋ねたのだが、その方はジェスチャーをしながらとても丁寧にスーパーまでの道を説明してくれた。また、スーパーで支払いに手間取る私たちに、二人がかりで対応してくれた店員さんなど、現地の人と交流するにつれて中国の人も親切で良い人ばかりであるという印象を持つことができた。

最終日前日、ホテルに向かうバスの中で、今回私たちの班に通訳を兼ねて随行してくれていた現地の女子大学生が、「日本人は私たち中国人に対してステレオタイプを持っていると思っていました。しかし今回の訪中団の皆さんは、私たちに興味をもち積極的に話しかけてくれ、日本人が中国に対してステレオタイプを持っていると思うことも、一種の日本人に対してのステレオタイプなのかもしれないと思いました。」と仰っていました。それを聞いて私は、ああその通りだなと思いました。私たちはお互いに偏見を勝手に持ち合っていて、ずっとすれ違いを起こしているのだなと。しかし、現地の大学生や私がそうだったように実際に会ってお互いを知れば、案外簡単にこのすれ違いはなくすことができる。

両国の今後を担う若者が交流してこのすれ違いを無くしていくことはとても重要なことだし、今後も続けていくことが重要だと思う。今後は私が感じた実際の中国の印象をなるべく多くの友人に伝えていきたいと思います。

「目で見えた中国北京」 増田 棕

私が今回中国を訪れるにあたって、3つのことに着目をした。それは人々の態度、街並み、そして食である。

日本人のステレオタイプの考え方で「中国の人は適当で態度が悪い。」といったことが言われることがある。果たしてそれは事実なのであろうか。もし事実であれば、日本とどのように違うのか。そのような点が気になり着目してみたくなった。

日本を出国してから最初に中国国際航空のクルーと接した。利用するのは2回目なのでサービスが良いことは知っていた。前回利用時と同じくとても良いサービスであり、中国人全員が同じ質でサービスを提供しているのであれば、「中国人のサービスは悪い。」と言われるようなことはあり得ない。もしや陸と空で人の態度は変わるのか。そのようなことまで脳裏に浮かんだ。中国北京に着陸をし、イミグレーションのスタッフと対面して初めて陸にいる中国人のスタッフと接する。私はとても緊張をしていた。しかし、「中国人だから」といったことはなく、イミグレーション特有の対応であった。むしろベトナムのイミグレーションのほうが不愛想で態度が悪いとさえ感じ、私の緊張と期待は無意味であった。

期待を裏切られた私は、再び中国人スタッフの接客を受けることができるチャンスを得る。それはスーパーの店員だ。私は一通り商品をかごにつめ、レジに向かった。そして、レジの店員が何かを聞いてきた。しかし、私は中国語がわからないため英語で聞き

返した。すると、英語が得意ではない彼女は嫌な顔することなくジェスチャーを使い私に伝えようとしてきた。私の期待はまたしても裏切られてしまった。

人によってサービスの提供の仕方、受け取り方というのは変わる。しかし、共通して言えることが、日本で受け入れられているサービスを提供している中国人が少ないのではないのだろうかということだ。確かに常に笑顔を絶やさずに接客をしていた人は少なかったように思える。そこが多くの日本人に受け入れられず、中国人の接客が雑であるという固定概念が生まれたのではないだろうか。

中国は2010年に日本を抜きGDP世界2位に躍り出た。普段東京に住んでいる私は、東京以上の街並みが首都北京には広がっているのではないだろうかと思いを馳せていた。その街並みを見ることを今回の訪中の一つの楽しみであった。

接客にいい意味で期待を裏切られた私は、主に移動のバスの中から景色を眺めた。すると、いわゆるオフィス街には都心の街並みと呼ばれそうな景色が広がっていた。高速道路はまるで東京の首都高のようにビルの間を走っていた。しかし、中心を少し離れるとまだまだ発展しそうな雰囲気があり、発展途上国と未だに呼ばれていることに少し納得がいった。首都の北京ですらそういったところがみられるのだから、地方などはもっと伸びしろがあるのではないだろうかと思った。その伸びしろが伸びれば、まだまだ中国は成長を続けると思った。

今日、日本で中華レストランを見ない日はないというくらい日本に浸透している。この度初めて本場で食べることができるといふことで、興奮を隠すことができなかった。現地でも存分に楽しむために、1か月前から日本で中華を食べることをやめていた。どのように味が違うのか。食べ方は違うのか。どのようなものが好まれるのか。気になることが多すぎて挙げ始めたらきりが無い。

いざ、北京に到着して、初めてレストランに入った二日目の昼食の時間。私は興奮していた。よく見る回転テーブルの席について並べられていく食事に目を奪われる。「量が多すぎる。」これが率直な感想である。中国人たちはとても大食いなのかと思った。しかし、残すことがマナーという話を耳にした。日本で育て残さず食べなさいという風に育てられてきた私には変な感じがするが、地元のルールに従う。隣国でも食事のマナーが変わるということが衝撃で新鮮であった。日本で食べるものと同じものもあれば、違うものもある。どこでその差が出たのかとても気になった。

今回の訪中で、中国のホスピタリティを目の当たりにし、中国の食文化に触れることができた。隣国にもかかわらず、日本と違うところが多いと感じた。将来は観光産業に進みたいと考えており、訪日外国人の一番大きい割合を中国人が占めているため、彼らに満足をしてもらうため現場で活かしていきたいと思う。将来に活かせる経験が社会に出る前にできてとても光栄である。

「北京での出会いと経験」 山本真子

今回、日中友好大学生訪中団員として、日本の大学生の代表として、訪中させていただいた経験は、今後の自分の人生に大きな影響を与えたいと思います。まず、支援してくださった日中友好協会、訪中期間にお世話になった全ての方々に感謝申し上げます。

私は、大学のゼミの先生にお声がけいただき、今回の訪中団に参加する機会を得ました。普段、大学では、中国語をはじめ、中国古典の読解や中国哲学を主に学んでいます。今までに3回の訪中経験がありましたが、今回の訪中は非常に貴重な機会であり、多くの出会いと経験を期待していました。

「日日交流」から始まった今回の訪中。普段の大学生活だけでは得られないような、様々な人、考え方と出会いました。日本人同士といいつつも、多様なバックグラウンドを持つ大学生と出会い、ともに行動し仲を深めるなかで、自分との差異を感じたり、共感したりしました。一人ひとりが違うからこそ面白いのだと、たくさんのお会いを通じて実感します。

それは、「日中交流」になっても同じであると考えます。2日目に北京城市学院へ行き、学校交流と中国文化体験を行いました。私は中国結びづくりを体験させていただき、北京の学生にも手伝ってもらいました。彼らは、私の拙い中国語を理解しようとしてくれ、短い時間ではありましたが、共に活動することで仲が深まったと感じます。それぞれ身に着けている言語や文化は違っても、お互いに歩み寄る気持ちを持つことで、友好的な関係を築くことができると考えます。2日目の午後には天安門広場と故宮博物館へ行き、中国の長い歴史を肌で感じました。夜には華やかな歓迎会を開催いただき、日中お互いに踊りや歌を披露し、エネルギッシュな発表に感激しました。中国の学生たちは、日本のアイドルの有名な曲やダンスを披露してくれましたが、自国の文化が他国においてどのように受け入れられているのかを客観的に知る、興味深い機会でもありました。

3日目は、代表的世界遺産である万里の長城を訪れました。極寒の中で、きつい傾斜を登っていくのは大変でしたが、壮大な景観に心を奪われ感動しました。長い歴史のなかで、数多くの人々の手により建設された万里の長城。建設のために犠牲になった人々、悠久の歴史に思いを馳せずにはいられません。本を読んだり、スマホ越しに画像を検索したりするだけではなく、自分の足で行きたいところへ行き、自分の目で見て肌で感じる。実際に経験して感じることの重要性を改めて実感しました。

一方で、4日目の午前中は最先端の中国企業を見学しました。「優客工場」というシェアオフィスは起業した若者のための施設で、快適な働く空間を作り出していました。日本でも様々な働き方が導入されていますが、中国でも、目的や条件に合った柔軟な働き方が求められ始めていることを知りました。午後には、人民大会堂にて日中大学生千人交流大会へ参加しました。代表団の一員として参加させていただき本当に貴重な機会であり、国を挙げて日中友好の発展のために様々な活動がなされていること、学生たちが積極的に活動に参加し、努力している姿を知りました。各地で楽しみながら交流を盛り上げている、日本と中国の学生たちから大きな刺激を受けました。国と国、という大きな規模の関係であっても、最初は人と人の関係から始まります。距離を縮めたい、分かり合いたいという気持ちがあれば、関係を前向きに発展させていくことができると思いました。

私は、これからも中国について多角的な視点から勉強を続けます。古典や文化をはじめ、文学や歴史など専門性を高めていくことができるよう、勉学に励みます。今回の訪中で、さらにその思いが強くなりました。また、恵まれたたくさんの友人とのご縁を大切に、これからも関係を保ち続けたいと思っています。そして必ずまた、中国を訪れたいと思います。

今回の訪中を支えてくださった方々、ご尽力くださった全ての方々に、心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

「訪中団だからできたこと」 和田優也

私は今回中国を訪問するに当たって、「普通の観光旅行ではできない経験をやる」という目標を立てた。今回、その目標通りに様々な貴重な経験をすることが出来、この訪中は一生忘れ得ぬ思い出となったと振り返って思う。今回の訪中を通して私は①中国の悠久なる歴史、並びに最先端技術を目の当たりにし、②日本人、中国人を問わず多くの人と友人になることができた。前者に関しては紫禁城、万里の長城、天壇等を参観して中国の歴史に触れた。私は今回迄に上海、香港、台湾を訪問したが、今回訪れた旧跡はどれも今まで訪れた場所とは比較にならない程規模が大きく、北京が長きに亘って中国の都として発展してきたことを感じさせられた。そのような歴史的建造物に圧倒された一方で、企業訪問では現在の中国が様々な分野において進んでいることを実感した。数年前までは、中国に対して欧米や日本の技術を真似ている発展途中の国だ、という印象を持っていたが、今回の訪中でそうした中国像は最早過去のものとなり、寧ろ日本よりも技術的に進んでいると感じることもあった。とはいえ、日本と中国にはそれぞれ優れている部分とそうでない部分とがあることは確かなことである。そこで、どちらの国が上か下かに拘泥するのではなく、互いに相手の優れている部分を認め学んでいく必要があるのだと感じた。この訪中で、互いに尊重することによってこの先も互いに発展することができるのではないかと考えることができた。

後者に関しては、同じ班に配属された大学生を中心に、多くの中国に関心ある若者と知り合いになれたことが、今回の訪中で最も行って良かったと思えたことである。班員は出身地も大学も異なる為初めは仲良くできるかとても不安だったが、凡そ5日間行動を共にして日に日に仲良くなっていき、最後には別れるのが惜しく感じられた。彼らは私が経験したことのないような経験をしていたり、私が知らないようなことを知っていたりして、彼らと話をすることは大きな刺戟となった。普段の生活ではなかなか出会えないような人達と様々な話をすることはとても楽しく、今後も関係を続けたいと思える人たちに会えたことは一生の宝になるだろうと強く感じる。また、人民大会堂で挙行された中日学生千人交流会で中国人の学生と連絡先を交換したり、街中で店員と話をしたりすることもでき、とても楽しい思い出となった。

中国に関心があるということ以外に共通点も接点もない仲間たちと共に中国の最先端に行く企業を訪問したり、人民大会堂で交流会に出席したりしたことは、文字通り「普通の観光旅行ではできない経験」であった。そして、今回の訪中で見たこと、話したこと、そして考えたことは私の今後の人生において大きな影響を及ぼすものであると強く感じる。今後は、今回感じたことを自らの内に留めておくだけではなく、友人にも積極的に共有していき、我々の世代で良好な日中関係を築くことが出来るように貢献していきたいと強く思う。